

「信念」を貫く

専務執行役員
技術開発本部長

鈴木 健一

Kenichi Suzuki
Senior Managing Executive Officer
Research and Development Division



最近、「難にありて人を切らず 快商・出光佐三の生涯(水木 楊 著)」、「爽やかなる熱情 電力王・松永安左エ門の生涯(水木 楊 著)」と続けて読んだ。いずれも明治生まれ、大正時代から戦争をはさんで戦後復興、さらには昭和の高度経済成長期へと、激動の時代において、常に国の将来を思い、信念を貫き通して現在の日本の基礎を築いた偉人である。

出光興産の創業者、出光佐三は、石油がいずれ石炭を駆逐すると予見し黎明期の石油業界に飛び込んだ。「人間尊重」、「自主独立」の精神を持って事業にあたり、「日章丸事件」や外資系石油メジャーとの闘いにおいてその信念を貫いた。

松永安左エ門については言うまでもなく「電力王」、「電力の鬼」などの異名をとり、現在の電気事業の基礎を築いた比類なき経済人である。

明治末期、電灯が普及し始めた頃、九州で電鉄事業の起業に携わり動力源である電力に関心を持った。早い段階から電気をエネルギーとして捉え、必ずや動力が電気に置き換わると考え、積極的に電源開発を推し進めた。

まだ「供給責任」の概念がなく、電力会社の供給規定には「一柱三十灯」の制限、即ち、「1本の電柱に30灯以上の申し込みがなければ電線は引いてあげません」という時代に、この「一柱三十灯」の制限を真っ先に取り外した。その結果、大いに電灯の普及が進んだ。戦後は国家管理下に置かれていた電気事業の再編にあたり、孤軍奮闘、9電力会社への分割民営化を実現した。また、電力技術の研究開発を進めるため、中立的立場を明確にして電力中央研究所を設立した。まさに現在の電気事業の基礎を築いた偉人である。

二人の偉人の足跡に触れ、明治生まれの日本人の気骨を強く感じた。根底には「独立自尊の精神」があり、「自ら考え創意工夫し」、「日本という国を愛し」、「国家、国民の益を思い」、常に「将来を考え」、「何事にも命を

懸けるような生真面目さ」と「叩かれれば叩かれるほど燃え上がる闘争心」を持ち…等々。

共通していることは、机上の空理空論ではなく、現場に根差し、事業者として実務に就いているものの気概と信念を貫いていることである。簡単に真似できることではないが、どんな苦境にも屈服しない強い気持ちをあやかりたいものである。

我が国の電気事業は、東日本大震災以降、原子力災害、計画停電、需給ひっ迫に伴う節電のお願い、そして火力燃料費増に伴う値上げなど、お客さまに大変なご心配とご不便をお掛けし、電気事業に対する信頼が揺らいでしまった。それと同時に、暮らしや産業活動に欠かすことのできない電気を安定的にお届けするという公益的使命の重要性を改めて痛感するところとなった。そして、今、戦後の電力供給構造の骨格をなしてきた垂直一貫体制、総括原価方式などについて電力システム改革の論議が進められているところである。実務に即して、将来にわたって安定供給がしっかり担保されるような制度設計を願うものである。

電力は「インフラ中のインフラ」と言われる。電力が安定的に供給されなければ、各種情報システム、通信、交通など他のインフラも機能を失ってしまう。安定供給を支えているのは、そこに働く「人」であり、安定供給に対する強い「思い＝信念」である。長い歴史の中で連綿と受け継がれてきた安定供給への思いを大切に、次の世代に繋いで行かなければならない。

また、安定供給を支える「技術」も常に高めていかなければならない。「技術開発が未来を拓く」という志をもって取り組んでいきたい。

齢重ねて孫も5人に増えた。我が5人の孫たちが現役を迎える時代になっても、日本の電気事業が健全に営まれていることを願い、電気事業者の一員として自分なりの信念を貫き通してみたいと思うこの頃である。